

<b>おくのほそみち</b> ～ ‘リハビリテーションが行なわれる場’ について考える前に～ 三步目： ‘あなた－私’ という関係 によって変わる ‘場’			4
		理学療法士 奥野 景子	

ある授業で「私は、クライアントのことをクライアントとしてしか見られないような気がするんです。なんてゆうか、尊敬とかそうゆう対象として見るイメージがわからないんですけど……」と、女の子が言った。このことについて先生が何か言っていたような気がするが、あまり覚えていない。‘クライアントをクライアントとしてだけしか見られないってどーゆーことなんやろー…??’ と、頭の中がぐるぐるしていた。

～前々回、前回のおさらいと今回のこと～

前々回のマガジンでは、「リハビリテーションが行なわれる場」について書こうと思っていました。ただ、いざ書き進めると‘場’そのものについて疑問が浮かび（誰にとってのホームグラウンド？アウェイ？‘家’ってそもそもなんなんだ？など）、「‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」というテーマで、それに関する自分の中にあるもやもやを書きました。

そして、前回のマガジンでは、‘場’に着目するのではなく、‘あなた－私’といった目の前にいる人と自分自身との‘関係性’が大切なのではないかという考えについて

エピソードを交えながら書きました。

今回のマガジンでは、「‘あなた－私’という関係 によって変わる ‘場’」というテーマで、‘関係性’の変化に伴いその‘場’の意味、あり方、ありようも変わるのではないか？、またその反対もあり得るのではないか？ということについて書いてみたいと思います。

1. 冒頭のエピソードでの  
ぐるぐるについて
2. 「呼応する‘関係性’」と「呼応する‘場’」
3. リハビリテーションが行なわれる場

1. 冒頭のエピソードでの  
ぐるぐるについて

「自分は、一緒にリハビリをしている人たちのことを何て思ってるんやろ…??」これこそが、私の頭の中のぐるぐるの正体だった。そして、そのぐるぐるに対する私なりの答えは、前回のマガジンそのものである。私にとって一緒にリハビリをしている人たちは、クライアントでも患者でも当事者でも利用者でもない、ただの「〇〇さ

ん」である。だから、私には目の前の「あなた」と向き合うことしかできないと思っている。そして、その「あなた」は、色々な疾患を抱えているかもしれないし、日常生活で悩みごとを抱えているかもしれないし、私の知らないことをたくさん知っているかもしれないし、私にとってどうでも良いことをとても大切にしているかもしれないし、誰にも言いたくない秘密を持っているかもしれないし、どーしようもなく最低だと思われてしまうような部分を持っているかもしれない。その全部を知りたいとは思わないし、その全部を知れるとも、理解できるとも、共感できるとも思わない。それでも、私が向き合わなければいけないのは、目の前の「あなた」でしかないと思っている。

## 2. 「呼応する‘関係性’」と「呼応する‘場’」

ここからは、エピソードを通して‘私’によって‘あなた’が変わり、‘あなた’によって‘私’が変わり、‘関係性’によって‘場’が変わり、‘場’によって‘関係性’が変わるということを書いてみたいと思う。

### ●ガウチョパンツ●

その日の訪問直後から私は彼女が履くガウチョパンツが羨ましくて仕方なかった。と言うのも、その時期、ガウチョパンツがとても流行っていて、自分も履きたいと思っていたものの、おしゃれに着こなす自信もなく、背の低い私にはただの少し長めの半ズボンみたいになるんじゃないかという不安もあって、店頭で気

になっても試着する気にもならない、けど、気になって目についてしまう、というような日々を過ごしていたからだった。

立ち上がり訓練の休憩中に『今日はおしゃれなの履いてますね～。今、流行のガウチョパンツじゃないですかあ～』と言うと、彼女は上品にうふふと笑いながら「娘が買ってきてくれたの」と言った。『私も良いなって思うんですけど、履きこなす勇気がなくて買えないんですよ～…』「えっ、なんで？ただ履くだけやのに？」『そりゃ背が高くてスツとした人が履いたらおしゃれですけど、小さい幼児体型が履いたら、ただのちょっと長めの半ズボンになりますもん…』「そうかなあ～？そんなことないと思うけど…ほら、Sサイズとか買えば良いやんツ」『…ああ～、出た出た！知らないでしょ？世の中のSサイズは、ほんまに小さい人にはおっきいんですよ！子どもの150が入る人にはSサイズはおっきいんですッ！全然Sじゃないんですからね！！』この後、立ち上がり訓練をしながらも立った時の裾の長さがあるだこーだ、そこから出てる足首の細さが肝心なんだ、ちょっとチビを馬鹿にしてるでしょ！？などなど、なんだか楽しい時間を過ごした。その時ばかりは、体幹が曲がったままの立位姿勢になっていることや回数を重ねるごとに徐々に膝が伸びにくくなっていることはどうでも良かった。でも、そんなところを気にしながら会話をして、彼女のガウチョパンツを見て、彼女の両手を支えながら立ち上がり訓練をしている自分のことが不思議で仕方なかった。

## ●重たいふすま●

「そのふすま、重たいやろ～？ごめんやでえ～」私は、いつも通りそのおばあちゃんが待つ部屋に入っていったのだが、今日の開口一番はこれだった。『ん？大丈夫でしたよ、ありがとうございます…』と言い終わらないうちにそのおばあちゃんは立ち上がり「んなあこたないわあ～、ほら！！ここで引っ掛かるやろ？？」と、ふすまの引っ掛かりを実演しながら説明してくれた。そして「こーゆーのは、ロウを塗ったら軽くなるんやけど、私の体じゃできひんしなあ…すぐに出来るんやけどなあ～」と続けた。いつも以上に腰を曲げ、大袈裟に悲しそうな声を出しているのがわかるくらいに大根役者な感じだった。だけど、もしかしたら本当に悲しいのかもしれないし、おばあちゃんの実演では確かにふすまは重たそうで、おばあちゃんの方では開けにくそうだった。だから、荷物を部屋の隅に置きながら『ロウソクってあるんですか？』と聞いてみた。すると、いつも以上に背を伸ばし、聞いたこともないような弾んだ声で「そりゃあるよ、あるに決まってるやんっ！！」と返された。‘こりゃ、確信犯やな’と思うと、不覚にも私の顔はニマニマしてしまった。おばあちゃんは「こんなこと頼んだらあかんのになあ～、また変なあばあが面倒なこと言ってきたわ、むなくそ悪いつて思ってるんやろお～？」と言いながら仏壇に向かい、引き出しからビニール袋の中に丁寧にしまわれたロウソクの箱を取り出して私に渡した。言っていることとやっていることが全く違う、完璧な大根役者だった。だけど、そ

の人らしい、京都の女らしい感じがどうにもこうにも憎めない。私は、言われるがままそのふすまの敷居の溝にロウをこすりつけた。仏壇用のロウソク一本がなくなるくらいだったから、結構頑張って塗ったと思う。「あぁー、これで大丈夫やわ、ありがとーなあー」と、ふすまを行ったり来たりさせながら嬉しそうにしてくれた。そんな顔を見ると私も調子に乗ってしまう。『この際、全部やってまいましょか！？』『えっ、そんなん悪いやん。何しに来てもらってるかわからんやん。怒られてまうわあ』と言いながらも、おばあちゃんはあははと笑っていた。私は、新しいロウソクを出して、おばあちゃん的生活動線にある全部のふすまの敷居の溝にロウソクを塗ってまわった。と言っても、二か所くらいだが。

たまに、そのおばあちゃんちのふすまを開ける時に‘次に引っ掛かりが出来た時は、もっと上手にロウソクを塗れる気がする’と思ってしまう自分がなんだか面白い。

## ●畳の部屋●

その部屋は、たまに大きな窓から庭を見る時に入る程度の部屋だった。仏壇があり、床の間には綺麗な掛け軸が、和箆箆の上には日本人形が飾られていて、そこから眺める小さな日本庭園はとても美しかった。そこにあるおじいちゃんご自慢の南天の木を見るのが好きだった。ほっこりする、どこか懐かしい感じがするその部屋で、なぜか乱雑な我が家の和室の面影を感じることもあった。

その日は、お庭を楽しむ為ではなく、

最近の検査でわかった病状を踏まえて、今後の方針を検討するサービス担当者会議が開かれる為その部屋に入った。関係者がぞくぞくと集まってきた。そして、会議が始まった。各担当者から色々な話があった。私からは‘リハビリでは、本人さんの意向に応じてお話を伺いながらやっています’と話した。そりゃそうだろうとなるのだが、それが一番大切で、それが一番難しいと思っている。会議が進むにつれて、いつもとは違う、その場の空気の色がわかるんじゃないかというくらい重たいものが部屋に充満する。最後に、おじいちゃんが自分のことを話した。上手く言えないが、とても強い人だなと改めて思った。その瞬間、部屋の重たい空気が切り開かれ、真空状態のように何もなくなるような、空気が張りつめた、本当の透明になったような気がした。

その後もその部屋には、何度か入った。お庭を見に行ったり、亡くなったおばあちゃんに手を合わせさせていただいたり、おばあちゃんと一緒に寝ていた寝室ではなくその部屋でリハビリをしたり。どの場面を思い出しても、同じ部屋なのに違う色が滲み出てくる感じがしてくる。

## ●西陣織●

玄関を開けるといつもと違う雰囲気を感じた。いつもは節約のためと電気をつけていないのに電気がついていて、大音量のテレビの音が聞こえない。何かと思って部屋に入ると、おばあちゃんだけでなく娘さんとお孫さんもいた。今日は、お孫さんが風邪で保育園をお休みし、お仕事を休んだものの仕上げないといけ

ない仕事があり、家でやっていると言う。娘さんは、西陣織の着物や帯に刺繍をする仕事をしている。私は、初めての光景にわくわくしたものの、横に座っているおばあちゃんとリハビリをしないといけないし、風邪ではあるが元気に走り回るお孫さんの相手もしないといけなかった。いつも通りに始めたものの、気になって仕方がない。ちらちら見ているとそれを感じたおばあちゃんと娘さんが西陣織の仕事、刺繍のこと、京都の織物業の歴史、最近の動向などについて教えてくれた。おばあちゃん自身は、自宅で西陣織の織物屋さんを旦那さんと一緒にしていた。手先が器用でしっかり者だからと、中学卒業時に声を掛けてもらって刺繍の世界に飛び込んだ娘さんのことを何度も自慢されていた。「女でも手に職があるってゆうのは大事なんやでえ。あんたもやけど、それがあつたら仕事があるんやからなあ」と。その娘さんの仕事を間近で見られることが嬉しかった。その仕事のことを娘さん自身から教えてもらえたのが嬉しかったし、楽しかった。

その日のリハビリの時間は、私の社会科見学のような感じだった。知らないことに触れられることも私がこの仕事を好きな理由の一つだと思う。

さて、いかがだったでしょうか？どのエピソードがどの視点から書かれているのか、どのことを言っているのかは、私にもよくわからない。それは、たぶん重なり合っている部分もあれば、角度によって見え方が変わる部分もあるような気がしている。上手く言えないが、関係性も場も、そこにい

る人や空気、そこで起きた出来事に呼応するように変化し続けながら流れているように思う。

### 3. リハビリテーションが行なわれる場

ついに、このテーマについて書きたいと思う。今回のマガジンの副題も「リハビリテーションが行なわれる場」について考える前に」としていたものの、考え続けた結果、たどり着けたような気がしている。(と言うより、今となっては、今までもこのテーマについて書いていたと思っている)

関係性が変われば、場も変わる。関係性が変わるのは、各々の役割が変わるから。その変化は、とても微細かつ繊細で、瞬時に起きる。常に起きていて、と言った方が良いでしょう。どの場面を切り取っても何か一役だけを担っている訳ではなく、そこには濃淡があり、捻じれたり、絡んだり、歪んだり、緩んだり、離れたり、近づいたり、後ろに隠れたり、隠したり、前に出してみたり、出ちゃっていたり…。これは、おそらく関係性にも場の現れ方にも言えることだと思う。

つまり、「リハビリテーションが行なわれる場」について考えるにあたっては、そこで誰が、何を、どのように行なっているのか、営んでいるのか、創造しているのかを考えなければいけないと思う。やはり「リハビリテーションって何なんだ？」に行きついてしまう。マガジンを通して、私の中のリハビリテーションの輪郭が浮き上がってこれば良いなと思っている。そして、それが「リハビリテーションが行なわれる場」

にも、それ以外の周辺にある様々なことにもつながっているのだと思う。

### ～ 終わりに ～

なんだかんだで、「リハビリテーションが行なわれる場」について考える前に、「リハビリテーションが行なわれる場」シリーズを今回で完結したいと思います！！上手くまとまっていないし、明確な何かが見つかった訳ではありませんが、自分なりに得られたものはあったように思います。このテーマについては、また今後のマガジンの中でちょろちょろと顔を出すかもしれませんが、何を書いても結局色々なことにつながっていると思うので、色々な視点から、色々なことが想起され、浮き上がってくるようなマガジンになればと思います。

次回から何を書くかは、まだ決めていません。でも、「リハビリテーションって何なんだ？」につながる何かにはなるはずです。引き続き、よろしくお願いします！！

### 👉 おくのほそみちのこれまで 👈

#### 第 24 号

新連載決意表明（「執筆者@短信」にて）

#### 第 25 号

リハビリテーションのこと

#### 第 26 号

‘リハビリテーションが行なわれる場’  
について考える前に

#### 第 27 号

‘リハビリテーションが行なわれる場’  
について考える前に  
二歩目；〇〇〇と私